付録１：見立てに必要な二つの概念、スペクトラムと閾値

スペクトラム

意見・現象・症状などが、あいまいな境界をもちながら連続していること。（大辞泉）

見立てをたてる心理業界においては、脳機能の特徴のように濃淡がある分布にどこかに存在している状況をさす。
知能指数は知能という尺度でのスペクトラムの指標ともいえる。
愛着障害においても、スペクトラムととらえ、症状の個人差を考えることが必要となる。

閾値　（読み　いきち　しきいち）

ある反応を起こさせる、最低の刺激量。しきいち。（大辞泉）

初期愛着形成が完了しなかったり、母の脳機能障害が理由による愛着障害が兄弟であったりなかったりするのは、個人の「閾値」の差によるものといえる。

後から愛着が初期愛着形成の完了とならない理由の解説

A：初期愛着形成は臨界期を伴う閾値があるため。

鳥が生まれたとき、最初に見えた動物を母親とみなす「刷り込み」は有名であるが、小鳥があるていどの時間を生きた後に親鳥を初めて見ても親鳥とはみなさなくなる、それは「刷り込み」が可能な時期が限られているということで、この「この時間までしかできない時期」ということが臨界期である。

＜初期愛着完了の条件＞
初期愛着形成は1歳半～3歳（時期には諸説あり）に臨界期が来るといわれている。臨界期までに愛着形成の閾値を超えると初期愛着形成が成立する。

＜言い方を変えると＞
臨界期までに初期愛着の閾値（１歳半～3歳）を超える刺激をうけなかったことが初期愛着形成の未完了の理由となる。臨界期を超えると一生初期愛着形成は完了しない人生（非定型心理発達）の人生になる。

付録２：３種類のサイコパスと「人生ゲームの駒」「サイコパス使い」

3種類のサイコパス

（詳しくは中野信子著　サイコパスを参照）

A　脳幹部分の情緒不感タイプ

喜怒哀楽を生み出す、脳幹部分の刺激に対する反応が薄く、恐怖をあまり感じない脳。危険な事や命を懸ける刺激に対して危険を恐怖と感じない感覚をもつ。冒険家や、性的に奔放になるとか、リスク軽視のキャラクター特徴がみられる。

B　大脳部分の想像力欠如タイプ

相手の気持ちや、自分の状況を客観視することができないため、自分の喜怒哀楽に従って行動はできるけど、他人の喜怒哀楽を想像力で参照して自身の行動に反映することができない。
脳機能障害によるサイコパスはこのタイプになる。

C　大脳部分と脳幹部分の情緒連結が薄いタイプ

相手の気持ちの喜怒哀楽や相手の苦しみや痛みを想像することはできるが、自分の喜怒哀楽と苦しみや痛みと重ね合わせて観る能力が薄くなる。
人格障害に受け止められたたり、巧みな演技性のある性格につながり、演出された人間ドラマの区別とサイコパスが不明瞭に周りにはうけとめられる。
脳機能に問題がなかったり、高知能のサイコパスはこのタイプになる。
一部の人は死亡するまでサイコパスと受け止められず、全人類が演技に騙されたまま、とてもいい人であったり、偉人として崇められていたり英雄となっていたりする。

「人生ゲームの駒」

Aタイプ＝冒険や危険や賭け事に無邪気に周りを巻き込む。

Bタイプ＝相手に発生するコミュニケーションの喜怒哀楽ではなく、コミュニケーションの自身の利害と自分自身の喜怒哀楽により行動を選択。

Cタイプ＝相手に発生するコミュニケーションの喜怒哀楽を「利用する情報」として、自分自身の行動や演技（高知能）を選択しながら、自分自身の喜怒哀楽から発生する欲望を満たす行動を選択。

BタイプもCタイプも損得が重要になるため、ゲームのようにコミュニケーション相手は扱われている。Aタイプは付き合う人の人生がゲーム的な状況となる。

「サイコパス使い」

Cタイプのサイコパスを見抜く力、BCタイプの欲望を見抜き損得を上手に伝える力、Aタイプに冒険を与える力があれば、サイコパスの「欲望」を満たす情報を与えながら、彼らの普通ではないコミュニケーション能力を利用して、裏の意図のある「仕事」させることができる。　（大きいリストラや狙撃や革命など）

付録３：違う意味をもつ同じ言葉の定義の使い分け

境界もしくは境界型もしくは境界例

境界型人格障害の省略表現であるとともに、まったく違う意味をもつ境界知能の省略表現が同じ境界になるため、区別することが必要。もしくは、省略せずに「境界型人格障害」または、「境界知能」と省略せずに表現して誤解をさけることが必要となる。

MR（エムアール）もしくは、精神遅滞

医療的には障害域にあるスペクトラムにある人をさすが、心理業界もしくは、精神医療の社会面でのケアをされる一部の方は、MRや精神遅滞という用語を、軽度心理発達障害から境界知能までの領域の方を表すこともある。
高橋和己先生の講義の場では、MRという言葉を後者の範囲で適応して用いている。

非定型

医療的には、脳機能障害域にある脳の状態を「非定型」というが、高橋和己先生の理論で、初期愛着形成が未完了の方の心理状態と心理成長を「非定型心理発達」と表現し、省略形として「非定型」という言葉を用いる。初期愛着形成の範囲で適応して用いている。特に愛着関連に関して学習されている方が用いる「非定型」という言葉はどちらの意味に使われているか注意して確認する必要がある。
「非定型心理発達」の概念はあまり広く知られていないため、周りに表現する場合は、「非定型心理発達」と省略せずに使い、「非定型脳機能」と区別して伝えることが必要。（さもないと、初期愛着未完了な方が脳機能に課題があると誤解されてしまいます）水島広子先生の書籍「毒親の正体」では非定型は、非定型脳機能の意味でつかわれています。

投影

カウンセラー業界では、転移感情、逆転移感情の理由の一つとしての「投影」がある、クライアントが起想するコミュニケーション相手とカウンセラーとを同一的に無意識的、意識的にとらえた態度や、カウンセラー側の人生体験の起想する人物をクライアントに過剰に適応する状態をいう。
一方、防衛機制の現象の一つとしても投影という言葉があり、自分自身の受け入れられない面を否認するため、相手がそういう面をもっていると押し付けることをいう。自分が気に入らない相手に、相手が自分を気に入らないと思っている。など。
どちらの言葉も、カウンセリングの見立てやスーパービジョンにはよく用いる言葉ですので、どちらの意味で使用しているかは明確にすることが大切と思われる。

付録４：虐待の三世代連鎖と愛着のトラブル

＜虐待の連鎖＞

１）脳機能障害が二世代に続いた場合

脳機能の状態が通常ではない（MR,ADHD,ASD）状態が2世代続くと、
その脳機能の影響のある虐待は連鎖する可能性がある。
ただ、その場合それぞれ祖母、母の脳機能の特性による虐待状態が
それぞれ発生していて、それが連鎖という現象に見えるともいえる。

２）母の愛着障害に起因する子供への虐待

祖母と母の関係で愛着不信を発生する状況があったのち、愛着障害を発症する母親が、パートナーに対して愛着障害によるトラブルを起こすように、自身の子供に対し愛着の限界を試す行為が結果として虐待につながることがある。
これは、祖母～母間は祖母の脳機能による虐待、母～子間は母の愛着不安による虐待となる。

＜心理発達障害（MR）の母の虐待悪化要因＞

心理発達障害のまま大人になると、
パートナーやカップルになる相手として、

１）成人期後期でかなり達観された成熟した大人
もしくは、
２）考え方が近い学童期心理の大人（同じMR）

とカップルになりやすい。

学童期同士のパートナーの場合は、身体的虐待や心理的虐待が
パートナーから行われやすく（実父、再婚相手問わず）、
それを母性で守るという感覚が出せずに、母はパートナーとの
関係を母子関係より優先させてしまい、死亡事例や重症事例を
招きやすくなる。さらに子供のような戦略で隠そうとするため、
事件として明るみになったあと、非道さが目立つようになる。

＜虐待ではないが虐待と誤解される事例＞

初期愛着形成未完了（非定型心理発達）の方が母親になるとき、
その子供の初期愛着形成は完了できるが、
母親：行動目的を存在基準の中心とする生き方（非定型心理発達）
子供：愛着を存在基準の中心に置く生き方（定型心理発達）
という生き方の違いによる衝突が生じる。
学童期に甘えられなかったり、思春期葛藤期に愛着不安となる可能性が高く、
子供が拒食症や不登校になったり、不安定になる。（子供の生き方の否定）
これは虐待ではなく、人生のスタイルの違いであり、これをきっかけに
母は、自身の初期愛着未完了の自覚と子供からの臨界期後の愛着を手に
入れることも多い。